

モンゴル外交私記―北東アジアの中の日本とモンゴル（連載第3回）

元在モンゴル日本国大使

元 NEANET 会長

花田 麿公

3. モンゴルと中国の国境条約

1963年の4月、研究員として外務省の中国課に勤務することになり、最初は崎山さんの所属する政務班の末席に座りましたが、後に調査班に移され独立しました。新任外務省員とは異なり、いわゆる雑用は与えられなかったのが、当初からモンゴルの中味の仕事ができただけは幸運でした。

出題者も正解がわからない超難関試験にたまたま17人が正解できて合格したと言われた外務公務員上級試験や、22名しか合格しない中級試験を突破して入省してきた方々と机を並べ、大学でたての若者が、専門知識を充分身につけた研究員として扱われて執務を始めたわけですから、傍目には良くは思われなくて当然だったのです。

しかし、勤務環境は研究室のようで、全体が知的作業を進めている雰囲気ではとても好ましく、また課の雰囲気が暖かい感じでした。私自身は学者になりたいと過ごしてきたので、外交官試験を受けようと思ったことはひとつもなく外務省に興味をもったこともなかったのが、仕組みがまったく分かりませんでした。そのため私は、執務上で気後れを感じたことがなく、むしろ、知的な雰囲気にやりがいを感じていました。そして、ときにこの人は神と思える超優秀な方に遭遇することがありました。私の出身高校も当時超難関の都立高校でしたので、高一入学時にすでに高校数学を終えている生徒が3人ぐらいいて、神がいました。学校の雰囲気がアテナイの学堂というような感じで廊下のそこそこで学問の論議がなされる雰囲気でしたので、ふたたび旧友の中に戻ったような印象でした。

さて、私の執務ですが、前回ふれたモンゴル月報、年報の作成作業のほかに、モンゴル・プロパガーの作業がありました。最初の作業の一つは、1962年にできたモンゴルと中国の国境条約の本質解明と調書作成の作業でした。国境条約の調書作成作業は崎山さんが主として進めておられました。新聞紙2ページ大より若干小ぶりの作業用の「モンゴル人民共和国地図」を1959年モンゴル科学委員会編の地図の翻訳版として作成し、外務省中国課が執務用として印刷しました。当時モンゴル地図がない中で、関係部門、専門家に配布されとても役立ちました。崎山さんはこの地図上に国境条約を記入していかれ、分析されていました。私はウネン新聞翻訳など下働きをしました。ケルンのようなオボを旅人は築きますが、国境線が何々オボから何々オボと引かれているのにびっくりして崎山さんにオボとは何か教えていただきました。後に、現地でおボをたくさん見ましたが、国境線のオボと重なり感慨深いものがありました。条約文は中国課で日本語訳を発行しました。ノモンハン事件（モンゴルではハルハ川戦争）で確定した国境線が認められていたのが印象的でした。

1962年中ソ関係（ロシアを当時の呼称ソ連と記し、略してソと表記します）が厳しくなる気配が濃厚になってきたとき、10月から12月にかけて突如中国とインドの間でヒマラヤをはさみ国境紛争が発生し、両国軍が戦いました。前年の1月からインドは中国に警告を出していたにもかかわらず、まさかの戦闘に発展したわけです。平和のイメージが強いインドが戦ったことに大学4年生であった私は驚きました。モンゴルは中国の被援助国であり、インドはモンゴルにとって社会主義圏外の唯一の友好国でしたので困ったのではないかと思います。

それにヒマラヤの中印国境地帯は中国側から見ればチベットであり、モンゴルにとってチベットは、1911年辛亥革命がおり、漢族が満洲族の清朝から解放された際、同時に解放され独立宣言した仲間であり、宗教が同じ真言系の仏教です。ですからモンゴルがチベット国境で発生した中印紛争に大きな関心を払ったのは当然だったのかも知れません。

研究員として席について、モンゴルが中印紛争になにか発言してないか、前年の新聞を調べました。11月25日付ウネン紙社説で原因は中印国境問題が未解決だったからとしていました。その直後に起こるモンゴル自身と中国の国境条約を踏まえていることは間違いありません。平和をベースに発展してきた両国の武力衝突を回避するよう望むとしていて、中国側が1959年の国境線から20km後退させたことに「モンゴル政府が熱烈に感謝する」と当事国でもないのに不思議なコメントをしていたのは当然だったのかも知れません。

ところが、中印国境紛争の直後の12月16日になって、周恩来総理からツェデンバル首相に書簡が送付され、国境条約に調印するため北京を訪問するよう招請されました。同18日ツェデンバル首相は招請を受諾するとの返簡を送りました。このような書簡は当然のことながら郵便でなく、駐在の外交機関を通じて交換されることを崎山さんから学びました。中国は友好国とは簡単に国境条約が結べるとの見本を示したと一般には解釈されました。

しかし、予備交渉は北京でなされましたが、当時の中国地図はモンゴルとの国境を未確定国境としていましたし、西部国境の北塔山（バイタグ・ボグド・オーラ）で1947年中国軍と衝突した歴史もあり（国民党中国政府はこれをもって中ソ友好同盟条約の破棄の理由の一つにしました）、また、国境線に種々の問題や、両国間での係争地を抱えていましたのでそう簡単ではなかった筈です。

さて、ツェデンバル首相は1962年12月25日特別機で空路北京を公式訪問し、26日に国境条約に調印しました。ツェデンバル首相は翌日の27日早くも帰路につき、今度はウランバートル鉄道で北京を出発し、帰国の途につきました。日程をはしおり、特別機の迎えをまたず汽車で帰国してしまったとの噂もありました。ちなみに、ウランバートル鉄道は、1956年1月1日から全通している中国からロシアまで南北を結ぶ「友好の道」と呼ばれる路線で、今モンゴルでメインの鉄道です。一帯一路構想において、露中「モ」三国経済建設計画の枠組みで、モンゴルが進めている「草原の道イニシアティブ」はこのラインがメインになります。

中国との国境問題は領土問題が絡んでいます。中国は腹の中では、モンゴルはロシアによって独立した地位を獲得しているが、本来中国の領土との強い執着を有しているようですので、この国境条約締結によりいよいよ最終的にモンゴルを諦めたものと当時理解しました。

1945年2月ヤルタ会談において米英はモンゴルのステータス・クオを認めることを条件に、ソ連の対日戦参戦をスターリンに認めさせました。ソ連の対日参戦の最中に、同年8月14日、モスクワで中・ソ友好同盟条約が締結されました。蒋介石の中華民国政府は、蒋介石が呼ばれないヤルタ協定（米英露3国）を背景にスターリンから強い圧力をうけて、国民投票による意思確認を前提に、モンゴルの独立をしぼしぼ認めました。モンゴルは同年10月20日にリファレンダムを実施して、参加した全員の賛成投票を得ました。中華民国は1946年1月5日モンゴルの独立を承認しました（因みに中華人民共和国は中華民国の立場を継承しています）。

しかし、旧社会主義国は当時「社会主義兄弟国」とか称して、外部世界に対して国家間関係について民主的、平等のようなそぶりをしておりましたが、実態はちがっていたようです。

毛沢東主席は1936年にエドガー・スノー（米国人ジャーナリスト）に対して「中国で人民革命が勝利するにいたれば、外蒙古共和国は、自発的に中国連邦の一部となることを願うでしょう」と述べています（『中国の赤い星』宇佐美誠次郎訳、1963年筑摩書房、76頁）。また、ユダヤ系ドイツ人ジャーナリストのガンサー・スタインが1944年に毛沢東主席に聞いたところ「モンゴル人は中国人ではありません。…独自の一族です。私は、共和国と国民党の建設者が与えた約束に従って、国民政府が行動するなら、外モンゴル人は再び中国の仲間入りするように希望しますし、そうなることを疑いません」と述べています。（ガンサー・スタイン『延安一九四四年』1962年、みすず書房、314頁）

これらは毛沢東の中国共産党が政権を取る前の考えであり、希望でした。しかし、政権を取ってモンゴルの独立した地位を認めた後に毛沢東主席はモンゴルに未練を残す考えを表明しています。

1954年フルシチョフ首相とブルガーニン元帥が訪中したとき、毛沢東首席は外蒙古を中国に返還してはどうかと提案したが、フルシチョフ首相は、これはウランバートルが決めることと応酬したとの報道がありました（1964年9月2日付プラウダ、私たちは日本の政党筋からもロシア側に取材した傍証を得たように記憶しています）。

鄧小平も中国は桑の葉の形をしているが、モンゴルの部分を食べられてしまったと述べていると聞いたことがあります。モンゴルを中国の一部と理解しているのでしょうか。中国の外交部長（外相）がうっかりモンゴルは中国の領土だと言及したり、未練たらたらです。私も民間レベルでモンゴルは中国の領土であると言う中国の方にお会いすることがたまにありました。

なお、余談ですが、中国の革命ロマンを伝えたアメリカのジャーナリストの一群がいて、エドガー・スノーやガンサー・スタインもその範ちゅうの人々ですが、この他にもアグネス・スメドレーやアンナ・ルイス・ストロングなどがいました。これらの人が書いた書籍が当時つぎつぎ発刊され、夢中で読みました。とくにスメドレーの『偉大なる道上下』（岩波書店）は朱徳将軍のことをとりあつかっていますが、朱徳将軍とモンゴル革命で指導的役割を果たした軍人スフバートルはその時代、育った環境、私淑する優れた知的指導者がいたことなど近似するものがあつたことを指摘して、このような条件で愛国的軍事指導者が出現したと卒論の一部で説明しました。今、中国革命を報道した米人ジャーナリストらの評価がかならずしも高くないのが残念です。

さて、本論にもどりますと、私見では、そもそも「元」の時代に中国は 100 年近くもモンゴル支配下にありましたが、モンゴルが漢民族の支配下になったことは、1921 年 7 月 11 日（ナショナルデー）の独立以前の 1 年余中国の北洋軍閥によってウランバートルが占拠されただけです。むしろ、社会主義中国になって内蒙古を強固に支配し続けておりますが、世界各地で異民族支配に反対闘争をしかけてきた中国とはつじつまが合わないように思われます。したがって、中国がモンゴルを自国領と主張するのは私には客観的に根拠がないように思われます。

清朝時代にモンゴルは清に支配されましたが、それは満洲族の国家大清帝国に支配されたのであって漢族によってではありません。しかも初代皇帝ヌルハチ夫人の 1 人として中国吉林省四平市付近出身のモンゴル人の姫イェヘ・ナラン氏がおり、息子のホンタイジは第 2 代の皇帝になりました。ホンタイジの御陵「東陵」は中国遼寧省瀋陽市にあります。ですから当初モンゴルは清朝の支配者側でもありました。1911 年辛亥革命のとき、大清帝国から解放されたのは、中国とモンゴルとチベットなどであり、そのモンゴルとチベットが中国の支配下に自動的に入るとの法的根拠はかなり疑わしいように思われます。多分、日本の学者をはじめ日本の皆さんが中国側の主張と中国側の文献にたって歴史を考えておられるからと理解しております。ここは検討の余地ありと思うのですがいかがでしょう。こんなことを言うと積年にわたり敬愛して止まない中国の友人たちに叱られそうですが、日本の老骨の一意見としてお許し願いたいものです。それに私は国家公務員として政府の見解に 100%従い執務してきたことはもちろんです。なお、清朝支配とモンゴルとの関係について、中国の少数民族とモンゴルとの関係について言及する機会があれば、若干記したいことがあります。

モンゴルと中国との間の国境は人家の密集してるところではなく、荒野に引かれたラインで、国境標識の Spann は長いところで 70 キロにもなっていました。

この国境を国境警備隊だけで守るのは無理で、牧民の協力は不可欠と思います。

崎山さんの説明では、牧民が羊の集団を追っていて風が追い風するとき、知らず知らずに風に流され国境を越えていることがあるそうです。双方ともそれをとがめだてしない慣習だそうです。でももめることも多々あったようです。村上春樹氏がノモンハン事件を扱った『ねじまき鳥クロニクル』で、こまかい情報を盛った国境地図が存在せず、国境地帯の漠然としていた様子を記しています。遊牧民には「国境線など必要ともしなかった」とし、「モンゴル平原」は「荒野というよりむしろ海に近いもの」と作家の鋭い感性で記しておられます。紅白歌手オヨンナは逆に海について田舎のうちの前から広がる草原のようだったと言っていました。そんなところの国境線を守るにはやはり、意識の高い民がいなくてははいけないのではと思いました。果たしてわれわれは海の中の国境線を守れるのだろうかと思いを通じて感じました。

モンゴル平時の国境線の様子を後に現実に国境地域に視察に行った時に見ました。どうも人の往来や通貨が融通むげに流通している場所がごく一部にあるように見受けられました。もちろん中国とモンゴルの両国関係が良好な時にしか現れない現象ではあるでしょう。